

医学部における受験機会の複数化の推移と 本学におけるその効果

平野 光昭

今日、国立大学の入試改革は、連続方式と分離分割方式の併存という形で落ち着いた観があるが、この問題は国民の多くから関心を寄せられており、分離分割方式を採用する大学が増えていることに対して、厳しい論評をくり返している新聞もある。各方面から提出された正当な問題には、前向きな姿勢で取り組むと同時に、正しい情報を提供することも大学の役目の1つであろう。

昨年の本紀要の中で、受験機会の複数化の問題を入試の「正確さ」という観点から考察し、世間で言われている国立大学の地盤沈下に歯止めをかけるためにも、複数化がいかに重要であるかを論じたが、「分離分割方式を採用する大学の増加によって、医学部受験は実質的には前期に1本化され、その余波で中堅私立のいわゆる難易度が上昇している。」と論じている医学雑誌もある。

本論文では、最初に受験機会の複数化はどのように推移したかを考察し、合せて現状を分析した。次に1980年から1991年までに本学の志願者及び入学者の質がどのように変ったか、学力の面から考察し、複数化の効果を検証した。

キーワード：受験機会の複数化、医学部、連続方式、分離分割方式、競争率

1. はじめに

戦後長い間続いた一期校・二期校制が1979年（昭和54年）に廃止され、受験生は国立大学を（一部の大学で実施している推薦入学及び第2次募集等は別として）1つしか受けられなくなった。これによって過激な受験競争が緩和されるのではないかと期待されたが、これは国立大学（一部の公立大学を含む）に限った改革であったため、この制度の実施前から、識者の間で、国立大学へ入学してくる学生のレベルダウンが懸念され、マスコミも盛んにそのような予想を流した。残念なことにこの予想は的中し、国立大学の地盤沈下は数年の間に黙視できない程大きなものになった^{1-5,7,11)}。

この主たる理由は、これまでも機会あるごとに述べてきた通り、極めて単純にして明快なものであるが、このころになってようやく、多くの関係者が「私立大学はいくつでも受けられるのに、国立大学を1つ

しか受けられないのでは、必然的にこのようになる。」ということを理解し、「再び国立大学の受験機会を複数化しよう。」ということが、国立大学全体の重要課題の1つとなり、1987年から新しい制度で入試が実施された。

このとき採用されたのが「連続方式の事後選択制」と呼ばれるもので、実施前の全国立大学に対するアンケートでは、圧倒的多数の大学・学部がこの案に賛成した。また、A日程・B日程のグループ分けで難航したが、出来上がったものは、かつての一期校・二期校と比べるまでもなく、大変良くバランスがとれていた。ところが、このバランスの良さが分離分割方式を生むという結果を招いた。すなわち、複数化初年度に、国立大学（とりわけ旧一期校）では経験したことのない大量の入学辞退者が出て、割増し合格をしたにもかかわらず、欠員の生じた大学が出た。このようなことは新方式によれば当然起こることで、そのために追加合格の制度も用意されていた。また、1人でいくつの大学・学部が受けられる私立大学では、長年にわたって、これよりはるかに多い辞退者に対応しており、追加合格者を決める煩わしさは、慣れによってす

く解消するものと思われたが、一部の大学が辞退者の出ることで自体を重大視した。しかし、複数化を止めて元に戻すことは出来ない状況にあったので、それらの大学は分離分割方式の導入を強く主張し、複数化3年目に4大学でこの方式による入試が実施された。

これを契機に、A日程、B日程、分離分割のいずれの方式・日程で入試を行うかを各大学の意志だけで決め、全体としての調整は全く行われなくなった。前期に合格して入学手続きをすると、後期の受験資格を失い、たとえ合格圏に入っているB日程の合格者とはならないため、受験生の集まるいわゆる有力大学は、翌年から競って、前期に80%以上の定員を配した分離分割方式を採用した。このころから、一部のマスコミは分離分割方式に対して厳しい見方を始めたが、一方で、「連続方式と分離分割方式の併存が受験生やその親に分かりにくいので、統一するのが望ましい。」という中教審の答申などが出た。

最近のマスコミの動向を見ると、特に朝日新聞(1991年8月14日)などは、「国立大学では受験生より大学の都合を先行させた分離分割入試がまた拡大した。一方、私大では受験生サービスに徹した入試が目立っている。……『国立離れ』に結びつかないかと懸念されている。」「分離分割入試も受験生の集まる有力大学は別として、中堅以下の大学にとっては苦しい入試方法になっていることを示している。」と述べ、「事実上複数受験の機会を受験生から奪った分離分割入試」と断定している。また、医学教育学会の選抜検討委員会委員長である橋本信也東京慈恵会医科大学教授から、NIKKEI MEDICAL 1990年12月10日号の「分離分割定着の余波、中堅私立の難易度上昇」という見出しの記事を見せられ、「分離分割方式を採用する国立大学が増えると、なぜ私立大学の難易度が上昇するのか。」と質問された。そこには国公立大学の入試日程についての説明があり、「分離分割方式では前期に定員の9割を振り分ける大学が多く、後期の合格者は定員の1割だけ。しかも論文のみの試験にするなど可否予想が難しく、受験生に敬遠される傾向にあり、医学部受験は実質的には前期に1本化されている。これが私立医大人気にも大きな影響を与えた。」と書かれていた。

さらに、朝日新聞は社説(1991年8月16日)でもこれを取り上げ、「……。受験生にとっては、現状の分

離分割方式は『一回勝負』を意味する。事実上、志望する他の国立大学、学部とのかけもち受験が難しいからだ。以前、『受験生のために』受験の機会を複数化しよう、という声があったことなど、とうに忘れられた形である。……」と述べている。「受験生のため」ということは、その大学の教育方針に合致した優秀な学生を採ることに通じ、「大学のため」でもあるのだが、はたして受験機会の複数化は形骸化してしまったのであろうか。以下、医学部におけるその推移と現状を統計的に分析し、他大学の分離分割方式への移行が、複数化以来連続方式のB日程で入試を行っている本学に、どのように影響しているかを考察する。

2. 受験機会の複数化の推移

1987年に連続方式でスタートした複数化は、医学部に関しても、当初非常によくA、B両日程間のバランスがとれていた。すなわち、総定員で見ると、25大学が属していたA日程グループが2466、26大学が属していたB日程グループが2445(いずれも定員から推薦入学者数を引く)で、88年もほぼ同様であった。ところが、89年には京都、大阪、神戸の3大学がA日程グループから分離分割方式に移り、広島大がB日程グループから分離分割方式に移った。一方、鳥取大がB日程グループからA日程グループに移ったため、形の上ではA、B各日程グループに属する大学数が2ずつ減じ、Aの2073に対しBが2112で、この両者間のバランスはとれていた。しかし、分離分割の4大学の合計では、前期の360に対し後期はわずかに60(14.3%)で、最初からバランスは無視されていた。

翌90年には、B日程グループに属していた東大が分離分割方式の採用に踏切ったことから、Bから分離分割あるいはAへ移った大学が計11大学に及んだ。すなわち、北海道、東北、千葉、浜松医科、宮崎医科の5大学が分離分割へ、新潟、富山医科薬科、札幌医科、福島県立医科、横浜市立の5大学がAへ移った。これらの大学の中には東大とは独立に移ったところもあるが、前記の4大学が分離分割方式を採用したことに加えて、東大が採用を決定したことは、特にBの大学に強い影響を及ぼした。旭川医科大、山形大はAからBへ移って受験生の併願をしやすくしたが、AとBのバランスは一挙に崩れ、1678:1207(大学数では20:

15) となった。さらに、分離分割を採用した16大学の前期と後期は1214と285で、後者の割合は19.0%と前年よりやや上昇したが、総数が増えたためその影響は顕著で、(A+前期)と(B+後期)の比は2892:1492 \div 2:1となった。

91年には90年とは逆に、A日程グループに属していた福井医科、名古屋、山口、大分医科、奈良県立医科の5大学が分離分割方式を採用した。A日程グループに属している大学は、B日程グループに属している大学と異なり、分離分割へ移った大学の「いわゆる先取り」の影響は受けないが、「それまで受験していた層が受けなくなる。」という影響を受け、競争率が低下する傾向にある。Aで試験を行うのと前期に定員の大部分を配して試験を行うのでは、実施面でも、受験者の層でも大差ないため、Bの大学に対する「先取り」の優位性を考えて、Aから分離分割へ移ったとしても何ら不思議ではない。一方で東京医科歯科、島根医科、熊本の3大学がBから分離分割へ移り、いずれも競争率を下げた。これに対して、かつて国立と試験日程を異にし多くの受験生を集めていた私立産業医科大が、AからBへ移って競争率を上げた。この結果、AとBだけを比べると、大学数で14:13、総定員で1175:1063と再びバランスが回復したように見えるが、分離分割方式の24大学の前期と後期は1806と400で、後者の割合は18.1%と前年より後退し、(A+前期)の総定員は(B+後期)の2倍を越えた。

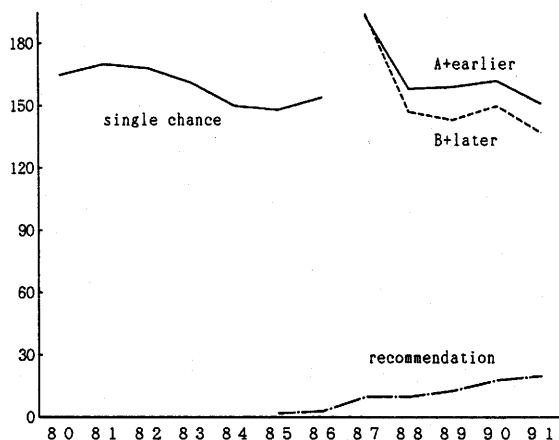


図1 試験日程別の志願者数の推移

このような定員の推移に対し、志願者数の推移は、図1に見られるように、80年から86年までの複数化前は、148~170 (100人を1とする。以下同様) と大き

な変動はなく、複数化初年度にA日程193、B日程194と各日程で複数化前を大きく上回っている。複数受験が可能になったことで、思い切って本来の第1志望である医学部に挑戦した者が多かったためであろうか。88年以降は、(A+前期)の方が(B+後期)をいく分上回っているが、両者の間に大差はなく、(A+前期)の志願者数が複数化以前の総志願者数に匹敵していることから、国公立(産業医科大を含む)の医学部志望者のほとんどが、2大学に願書を出していることが推測される。また、推薦入学者総数が増加していること¹⁰⁾、併願先のない者や医学部以外の学部と併願している者も多少はいることを考えると、志願者の実数が減少の傾向にあるとはいえない。

ところで、分離分割方式の大部分の大学が、表1に見られるように、前期では学科試験を課し、後期では小論文又は面接を課している。同一大学の前期と後期で異なる試験を行うことにはそれなりの意味があるが、全体として前期と後期で類似した試験が行われなければ、昔から「2兎を追う者は1兎も得ず」と言われているように、受験生は前期と後期の両方を受験することをためらうことになる。正に、朝日新聞やNIKKEI MEDICALの記事は、国立大学の入試の現状をよく観察した論評である。

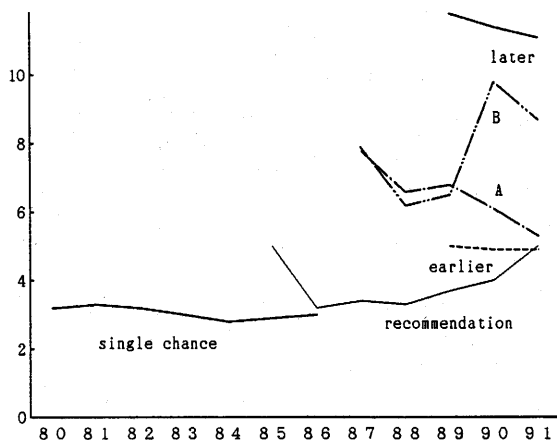


図2 試験日程別平均倍率の推移

図2に見られるように、分離分割方式が本格的に導入された90年に、A日程グループの平均倍率とB日程グループの平均倍率の間に決定的な差が生じている。唯一、前期と後期で同じ学力試験を課している京大は、前期の倍率が年々低下しているのに対し、後期は年々上昇して、90年には30.2倍という驚くべき値を記

表1 分離分割方式の大学が前期と後期で課す試験科目

	前 期	後 期
1	数学Ⅰ, 代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理必須, 化学, 生物から1科目 英語Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	総合問題, 面接
2	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 物理, 化学, 生物から2科目 面接	小論文, 面接
3	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅱ B・C, ドイツ語, フランス語から1科目	物理, 化学, 生物から1科目 英語Ⅱ B・C
4	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C 小論文 面接	小論文, 面接
5	センター試験で受験しなかった物理, 化学, 生物から1科目 英語Ⅱ・Ⅲ B, ドイツ語, フランス語から1科目 小論文	小論文, 面接
6	国語Ⅰ, 国語Ⅱ 数学Ⅰ, 代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計(統計的な推測の部分を除く) 物理, 化学, 生物, 地学から2科目 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B, ドイツ語, フランス語から1科目(問題の一部を中国語を含む別の外国語に代えることができる)	総合科目Ⅰ 化学, 生物 個人面接
7	数学Ⅰ, 代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 総合問題Ⅰ, Ⅱ 面接	小論文, 面接
8	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C 面接	小論文, 面接
9	代数・幾何, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅱ・Ⅲ B 小論文 面接	面接
10	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目 面接	調査書, 面接
11	国語Ⅰ, 国語Ⅱ 数学Ⅰ, 代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	前期と全く同じ
12	数学Ⅰ, 代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	小論文, 面接
13	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物, 地学から2科目 英語Ⅱ・Ⅲ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	小論文
14	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 英語Ⅱ B・Ⅲ C 小論文	小論文, 面接
15	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 英語Ⅱ B・Ⅲ C 面接	小論文, 面接
16	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅱ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から2又は1科目	小論文, 面接
17	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学 英語Ⅱ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	面接
18	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 物理, 化学, 生物から1科目 面接	小論文, 面接
19	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 英語Ⅱ B・Ⅲ C	小論文, 面接
20	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅱ B・Ⅲ C, ドイツ語, フランス語から1科目	英語Ⅱ B
21	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計 物理, 化学, 生物から1科目	小論文
22	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分 小論文	英語Ⅱ B・Ⅲ C 小論文
23	小論文	面接
24	代数・幾何, 基礎解析, 微分・積分, 確率・統計(資料の整理及び統計的な推測を除く) 物理, 化学, 生物から2科目 英語Ⅱ B・Ⅲ C(英語Ⅱを含む) 調査書 健康診断	小論文, 面接 調査書 健康診断

録している。また、理科あるいは総合問題として後期で学科試験を課している（英語のみは除く）北海道、東北、東京、京都の4大学の平均も21.6倍という高い値で、これらは上記の論評を裏付けるものである。この4大学の競争率が高いのは、必ずしも試験科目のためばかりではないと思われるが、これでは合格が運・不運に左右され、複数の受験機会が生かされているとは言えないのではなからうか。

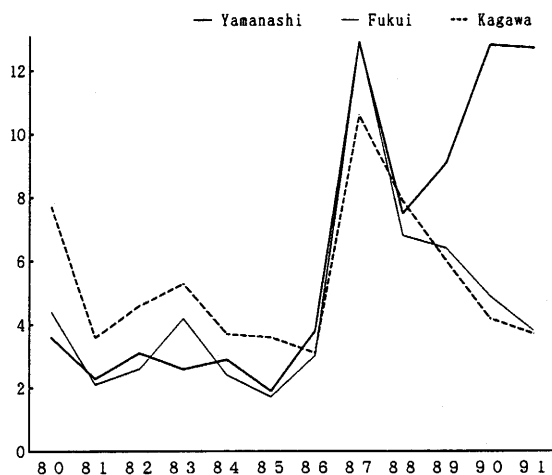


図3 同時に開校した3大学の志願倍率の推移

この節の最後に、80年に同時開校した本学、福井医科大学、香川医科大学を比較して見よう。複数化以来Bで実施している本学に対し、福井、香川の両大学は90年までAで実施し、91年には福井が分離分割に踏み切っている。3大学の倍率は、図3に見られるように、85年までは香川が他の2大学より高いが、互いに非常によく似た状況で推移し、86年～88年には3大学がほとんど一致している。ところが、89年に本学と他の2大学の間にやや差がつき、90年にはその差が極めて大きなものになっている。91年には福井、香川の両大学の倍率がさらに低下し、複数化前の状況と変らなくなっている。

3. 本学における複数化の効果 (その1)

分離分割方式へ移行する大学が多い中で、本学がB日程にとどまって試験を実施してきたため、複数化以降最低でも7.5倍、最近の2年間は13倍近い高い競争率を誇っているが、果して質のよい学生が採れているのであろうか。共通第1次学力試験及び大学入試セン

ター試験（以下両者を総称して共通テストと呼ぶ。）の成績によって、本学の志願者及び上位100人の学力を全国の同テスト受験者と比較して、複数化の効果を考察する。

「学力が高いだけで質の良い学生と言えるか。」という意見のあることは十分承知しており、我々も「その通りである。」と考えるが^{6,8,9)}、学力以外の能力や適性のある者を選抜するという問題は、受験機会の複数化とは別問題で、試験で何を課し、選抜でどのような資料を重視するかの問題である。また、第2次試験の成績を年度間で比較することは極めて困難で、入学後の成績も、授業が学年単位で行われているので、異なる年度の入学者を比較する資料には適さない。

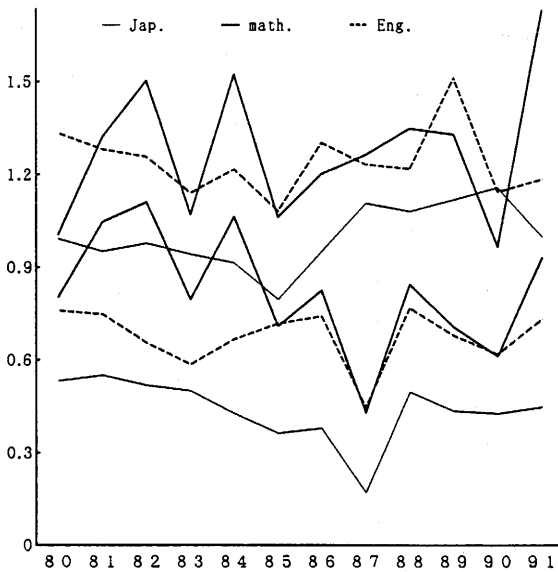
ところで、入学者の共通テストの成績ではなく、上位100人の成績を用いるのは次の理由による。すなわち、総合成績で合格者を決めるのは、ただ一度の試験の結果より、複数の資料による方が信頼性が高いと考えてのことであるが、12年間に共通テストと第2次試験（個別学力検査）の間の配点比率が2:1から2:3まで変化しており、一般に第2次試験のウエートが大きくなれば、共通テストによる順位と総合成績による順位との間の転位（共通テストの順位が*i*の者の総合成績の順位を p_i とし、 $i < k$, $p_i > p_k$ となっているとき、1つの転位があるという。）の数が増え、総合成績で上位100人の共通テストの平均値が下がるからである。したがって、辞退者が生じて順位が繰り上がる場合は、辞退者の総合成績順位に相当する共通テストの順位のを除外し、残った者の中で上位100人の成績を用いる。なお、補正等を行わない。

いま、このようにして求めた上位100人の平均値を x 、志願者全員の平均値を y 、全国の受験者の平均値及び標準偏差値をそれぞれ m 及び σ としたとき、

$$z_s = \frac{x - m}{\sigma} \quad \text{及び} \quad z_a = \frac{y - m}{\sigma}$$

を年度の関数としてグラフにしたものが図4～図6である。

図4は、12年間本学が必須として課している国語、数学（90、91年は数学Ⅰのみ）、英語（89年までは独、仏も選択できたが、実質は英語必須）に関するもので、言うまでもなく上方にあるのが z_s である。 z_s を見ると、国語は85年までは単調に下がり、複数化された87年以降は86年以前よりいずれも高い。数学は86

図4 必須3教科の z_s 及び z_a の値の推移

年まで変動が大きく、87年以降は90年を除いて高いところで安定し、91年に最高を記録している。90年に低いのは、第1回センター試験の全国平均値が極めて高く、標準偏差が小さくないことによるもので、質の低下を意味するものではなかろう。逆に、91年に高いのは全国平均値が例年になく低いことの影響もあろう。英語は国語と同様に85年まで低下の傾向にあり、皮肉にも第2次試験に英語を加えた85年に、著しい倍率の低下によって最低を記録している。86年からは比較的高い値を保ち、全国平均値の低かった89年にピークになったが、第2次試験から英語を外した90年には急落している。競争率の上昇等による上位100人の質的变化を見るとき、全国値の変動の外、共通テストで課す5教科の配点、第2次試験で課す教科・科目及びその配点の影響も考慮する必要があるが、この変動は受験者の層の変化をもたらすから、単純に補正するのではあまり意味がない。

次に z_a のグラフを見ると、3つとも86年までは z_s と大変よく類似している。すなわち、国語は年々低下して、85年に最低を記録し、数学は z_s と全く同じ増減をし、倍率の高い年に高くなるという、通常考えられることとは逆の傾向が見られる。英語は倍率の低かった85年に上昇していることが z_s と異なる。複数化初年度で13倍近い倍率だった87年には、 z_a が3教科とも最低を記録している。88年には倍率の低下に伴っ

て、3教科とも大きく上昇し、その後倍率が再び13倍近くまで上がったにもかかわらず、国語と英語は複数化前とあまり変わらない水準を保っている。87年以後、数学と英語はよく似た変化をしているが、数学は、第2次試験が数学、物理、化学であった84年までと比べると低くなっている。しかし91年には、3倍程度の倍率だった複数化前と変わらないレベルの受験生が、定員の13倍も集まっている。

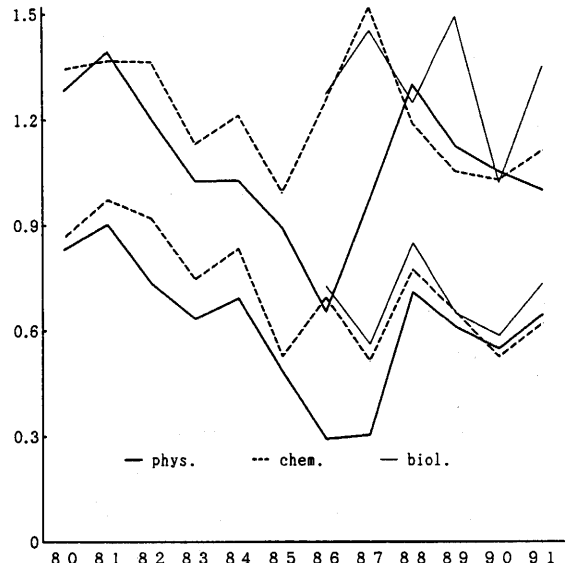
図5 理科3科目の z_s 及び z_a の値の推移

図5は、物理、化学、生物について大変変動に富んだ折れ線を描いている。まず z_a を見ると、86年の物理を唯一の例外として、3科目の増減が完全に一致し、87年までは低下の傾向にある。特に86、87の2年は物理が低く、化学及び生物との差が大きい。85年には第2次試験に英語を加えたこと、86年には第2次試験で物理、化学の一方選択としたこと、87年から共通テストも第2次試験も1科目選択としたことなどが原因と考えられる。また、90、91年に物理と化学が逆転しているのを例外として、生物、化学、物理の順に z_a の値が大きいのも注目に値するが、全国的に見ると、生物の受験者の中には文系の者が多く、物理受験者の大部分は理工系の学部を志す者であることが原因であろう。

z_s のグラフは、国、数、英の場合と同様に、倍率が大幅に上昇し、自己採点制度がなかった87年を除くと、 z_a のグラフと類似した増減をしている。言うまで

もなく、87年以降 z_s と z_a の差は大きくなっているが、上位100人の理科3科目のレベルは、複数化によって上昇したと見るより、低下の傾向に歯止めがかかったと見るのが妥当であろう。

さて、我々が最も関心をもっているのは、総点の z の値である。しかし、複数化以降共通テストはいわゆるアラカルト方式になったため、総点の全国平均値及び標準偏差値が存在しない。そこで、次のようにして想定値を定め、これを m 及び σ の値とした。まず、社会科及び理科について、各科目の平均値の受験者数をウェイトとした加重平均を求め、これを社会科及び理科の平均値とした。その上で、本学での各教科の配点に従って和を求め、 m の値とした。なお、配点が1000点でない年度のもは1000点になるように換算した。

標準偏差値については、5教科の間の相関係数が求められていないので、平均値と同様な方法で想定値を定めることはできない。そこで、重線形回帰

$$y = a_0 + \sum a_i x_i$$

によって想定値を定めることとし、変数として、国語、社会2科目、数学、理科2科目、英語を用いることを当初考えたが、観測値に相当するものが80年～86年の7組しかないのを、これを断念し、国語 (x_1)、数学 (x_2)、英語 (x_3) の3つだけを独立変数として、連立方程式

$$\frac{\partial D}{\partial a_j} = -2 \sum_k (y_k - a_0 - \sum_i a_i x_{ik}) x_{jk} = 0$$

$$x_{0k} = 1 \quad j = 0, 1, 2, 3$$

を解いて $a_0 \sim a_3$ を求め、これによって87年以降の標準偏差の想定値を定めた。年度によって配点比率も異なり、これはかなりラフな定め方であることは否定できないが、これに基づいて z の値を求めた(実線)。なお、参考までに標準偏差を12年間同一(全国平均値との差のみによる)として求めたもの(点線)のグラフも合せて図6に示した。

z_s は、複数化前の82年が全体で2番目に高いこと、複数化後の90年が全体で2番目に低いことを例外として、複数化後は複数化前よりいずれも高くなっている。そこで、「一般に複数化後 z_s の値が高い。」と言えるか否かを順位和を用いて検定した。高い順に並べると、91, 82, 87, 89, 88, 84, 81, 83, 86, 80, 90, 85となり、複数化後の順位数の和 R は24で

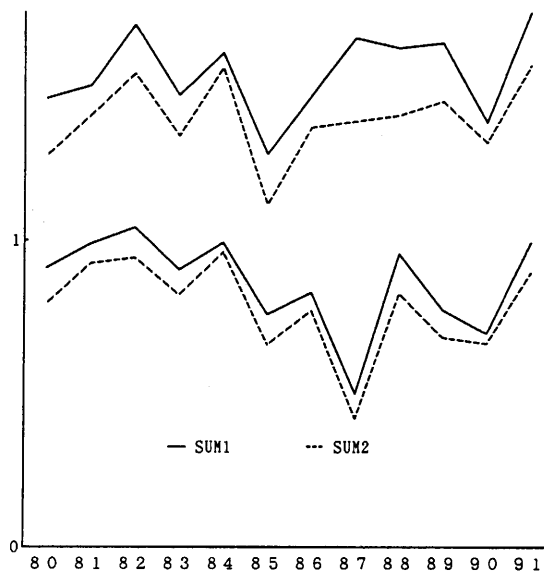


図6 総点の z 、及び z_s の値の推移

あるが、 $n_1 = 5$, $n_2 = 7$ のときは、 $P(R \leq 22) = 0.053$ であるから、 $\alpha = 0.05$ の棄却域には入らない。第1回センター試験が行われた90年に、全国平均の想定値が686と異常に高かったのも、中央値はさらにこれを大きく上回ったものと推測されるが、本学の受験生に関しては頭打ちの現象が見られた上、低得点者の存在が標準偏差の想定値を大きくしたことが原因で、 z の値が小さくなっているものと考えられる。90年を除外するならば、 $R = 13$ となり、 $n_1 = 4$, $n_2 = 7$ のときは、 $P(R \leq 13) = 0.021$ であるから、 $\alpha = 0.025$ の棄却域に入る。

教科別でも見られたように、 z_a は複数化初年度に大きく下がっている。この原因として、いわゆる難易度の見当がつかなかったことばかりではなく、この年度に限り「自己採点制度」が中止されたことを忘れてはならない。このことについては、文献7)の文献欄に掲載されている文献1), 2), 3), 4)を見ていただきたい。88年以降の z_a は85, 86年の水準にあり、志願者全体でも低下の傾向に歯止めがかかっていることが分かる。そして、いわゆる有力大学と呼ばれているところが分離分割方式に集まった91年には、定員の13倍近い志願者の平均値が、極めて高いレベルにあり、複数化とりわけB日程で実施している効果が顕著に現れている。

4. 本学における複数化の効果 (その2)

本学に入学してくる学生のレベルを測るもう1つの方法として、併願者の両大学(本学と併願先の大学)への合格率を比較するものがある。昨年もこの方法によって本学における複数化の効果を検証したが、これによれば他大学における動向も推測される。しかし、大学名が分かると、いろいろな支障があると思われるので、具体的な数値を記すことは避け、すべてその率で表すことにした。国公立大学医学部(東大理Ⅲ及び筑波大医学専門学群を含む)の中で、平成3年度に本学との間に併願者のあった大学数は38、このうち併願者数が10以上の大学数は25、併願者数が最大であった大学のその数は153で、これらの数はいずれも昨年を上回っている。併願者数が10以上の25大学と併願者数が9以下の13大学をまとめて(26番目)、合格率等を表2に掲載した。

a は、本学と左の番号の大学との併願者のうち、併

願大学に合格した者の数を本学の合格圏(合格圏にいた者を合格者と見なす。以下同様)にいた者の数で割ったもので、この数字が併願大学と本学を比較したいわゆる難易度の目安となっている。 b は本学の合格圏を追加合格圏まで広げて、その該当者数を分母としたものである。併願大学の合格者の中には、その大学への追加合格者は一切含まれていないが、前期に合格して辞退する者はほとんどいないものと思われる。医学部では、定員をオーバーすることが許されないために、本学では当初合格者を118人に抑え、21人も追加しているので、 a だけを難易度の目安とするのは適当でない面もあるが、追加合格に当っては、併願大学合格者が多数いて、追加合格圏がかなり広がっているので、 b を目安とするのはより不合理とも考えられる。 c は本学と左の番号の大学との併願者の本学への合格率、 d は c と同様であるが、追加合格者を含めたものである。また、 e は併願大学への合格率である。 f 及び g はダブル合格者の志願者に対する割合で、後

表2 本学と併願大学との合格率の比較

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
1 *	∞	∞	0.000	0.000	0.200	0.000	0.000	—	—
2 *	∞	∞	0.000	0.000	0.118	0.000	0.000	—	—
3	∞	∞	0.000	0.000	0.176	0.000	0.000	—	—
4	3.250	2.600	0.121	0.152	0.394	0.091	0.091	0.750	0.600
5 *	2.667	2.667	0.176	0.176	0.471	0.176	0.176	1.000	1.000
6 *	2.667	1.333	0.075	0.150	0.200	0.050	0.125	0.667	0.833
7	2.500	2.500	0.167	0.167	0.417	0.167	0.167	1.000	1.000
8	2.000	1.455	0.118	0.162	0.235	0.074	0.074	0.625	0.455
9	1.667	1.667	0.150	0.150	0.250	0.125	0.125	0.833	0.833
10	1.500	1.200	0.136	0.169	0.203	0.102	0.119	0.750	0.700
11 *	1.500	1.200	0.129	0.161	0.194	0.097	0.113	0.750	0.700
12 *	1.333	1.333	0.231	0.231	0.308	0.231	0.231	1.000	1.000
13	1.286	1.125	0.194	0.222	0.250	0.083	0.083	0.429	0.375
14 *	1.286	0.857	0.092	0.137	0.118	0.039	0.059	0.429	0.429
15 *	1.000	0.750	0.167	0.222	0.167	0.056	0.111	0.333	0.500
16	1.000	0.500	0.033	0.067	0.033	0.000	0.000	0.000	0.000
17 *	1.000	1.000	0.033	0.033	0.033	0.033	0.033	1.000	1.000
18	1.000	0.750	0.091	0.121	0.091	0.000	0.030	0.000	0.250
19	0.857	0.750	0.131	0.150	0.112	0.047	0.056	0.357	0.375
20	0.571	0.500	0.226	0.258	0.129	0.097	0.097	0.429	0.375
21 *	0.500	0.200	0.143	0.357	0.071	0.000	0.071	0.000	0.200
22	0.500	0.333	0.267	0.400	0.133	0.133	0.133	0.500	0.333
23 *	0.500	0.400	0.205	0.256	0.103	0.077	0.077	0.375	0.300
24 *	0.417	0.417	0.414	0.414	0.172	0.138	0.138	0.333	0.333
25 *	0.400	0.400	0.250	0.250	0.100	0.100	0.100	0.400	0.400
26	0.429	0.333	0.237	0.305	0.102	0.102	0.102	0.429	0.333

$$a = e / c, \quad b = e / d, \quad h = f / c, \quad i = g / d$$

者は追加合格者を含んだものである。 h 及び i は本学合格者に対するダブル合格者の割合で、後者は追加合格者を含んだものである。なお、番号に*印のついているのが前期で、他はAである。

*印の大学数は昨年の6から13に倍増し、昨年は番号1～6の大学はすべてAであったが、今年は前期が4つを占めている。18番目までが $a \geq 1$ を満たしているのは昨年と全く同じであるが、 $a < 1$ を満たす大学が7つを数え、これらはいずれも難易度の高い大学であるから、複数化前までは、国公立大学医学部の中で最も入りやすい大学の1つに数えられていた本学が、今や極めて入りにくい大学の1つになっていることがうかがえる。併願者数でも a の値による順序でも、昨年と大きく変わっていないが、Aから分離分割に移った山口との併願者数が57から40、奈良県立とが45から30、福井とが35から17に減じている。逆に、Bから分離分割に移った東京医科歯科との併願者数は39に達した。複数化当初は福井との併願者が100人前後あったことを考えると、前期で合格者をしばることが、いかに受験生の志望に対する配慮の欠けた方法であるかが分かる。

番号26にまとめられた併願者数が9以下の大学の合計では、昨年より9人多い59人の併願者中14人が本学の合格圏に在るが、併願大学に合格している者は6人で、昨年と一変している。しかし、この最大の原因は併願大学の相違である。14人の併願大学を見ると、いずれも難易度の高いいわゆる有力大学である。関東地区で本学とともにBであった東京医科歯科が分離分割に移ったことが、本学を一層難易度の高い大学に押し上げたと言えるのではなからうか。番号1～3の大学は別として、 $c=f$ の大学数は昨年より1少ない4で、昨年1だった $e=f$ の大学数が3となっていることも、今年はレベルの高い大学との併願者が増加していることを示している。しかし、ダブル合格者の多くが併願した長い歴史のある総合大学を選ぶ傾向は、今年も変わりなく、複数の受験機会があるからこそ、多くの優秀な受験生が本学に集まったと言える。

なお、このような比較をするとき、受験生は第1志望の大学の課す試験科目に沿って勉強していることにも考慮を払わなければならないことはもちろんである。また、入試が一発勝負であることを考慮して、本学受験生の入試の成績(センター試験を含む)と併願

大学との関係を見ると、センター試験初年度の昨年と異なり、世間で言われている「輪切り進路指導」がかなり進んでいるように思える。

謝 辞

入試の追跡調査に関して、ある場合には共同研究者であり、本論文の原稿に目を通され、貴重なご意見を下さった川田殖教授、データの整理、コンピュータへの入力、ワープロによる原稿作成の一切を担当して下さい。入学者選抜方法研究委員会研究補助員の望月恵さんに、日ごろのご支援と合せて、感謝の意を表したい。

文 献

- 1) 平野光昭(1988) 受験機会の複数化—その意義・問題点・本学での対応と成果—。大学入試研究の動向(国立大学入学者選抜研究連絡協議会), 第6号, 19~28
- 2) 平野光昭, 外(1988) 受験機会複数化の将来像をめぐって(シンポジウム)。国立大学入学者選抜研究連絡協議会研究報告書, 第9号, 403~429
- 3) 平野光昭, 川田 殖(1989) 受験機会の複数化と選抜方法。山梨医科大学入学者選抜方法研究委員会報告書, 第3号, 1~36
- 4) 平野光昭, 川田 殖(1989) 「受験機会の複数化」への対応と成果(その1)。同上, 37~62
- 5) 平野光昭(1989) 入試に関する諸問題の数学的考察。山梨医科大学紀要, 第6巻, 34~43
- 6) 平野光昭(1990) 面接の評価による入学後の成績の予測(第8回入学者選抜に関する討議会報告)。医学教育, 第21巻・第4号, 276~277
- 7) 平野光昭(1990) 受験機会の複数化の確率・統計的考察。山梨医科大学紀要, 第7巻, 49~58
- 8) 平野光昭, 川田 殖(1991) 面接の評価の信頼性と妥当性。大学入試における実技・面接・小論文の評価に関する研究(平成2年度科学研究費補助金による研究), 研究成果報告書, 31~66
- 9) 平野光昭(1991) 面接の評価と入学後の成績等との関連について。大学入試研究ジャーナル(国立大学入学者選抜研究連絡協議会), 創刊号, 10~15

- 10) 平野光昭 (1991) 大学における望ましい推薦入学
のあり方は何か。教職研修 (教育開発研究所),
第225号, 54~55
- 11) 友田泰正 (1991) 大学入試改善への考え方に問題
はないか。同上, 52~53

Abstract

Transition of the Pluralization of Chances to Apply for Medical Departments in the National Universities and Its Effect on Our College

Teruaki HIRANO

Today the reform of the entrance examination in national universities seems to be brought to an agreeable ending in the co-existence of so-called "renzoku system" and "bunri-bunkatsu system". However this reform is a matter of increasing interest for the great many people of our country, and some newspapers have been severely critical upon the increase in the introduction of "bunri-bunkatsu system" by the national universities. It should be one of the major tasks of the university to tackle positively with judicious proposals raised up from every point of view and, at the same time, to provide sound informations for the applicants and for the public in general.

Last year in this journal we took up this topic of the pluralization of chances to apply for national universities from the view point of "accuracy", and emphasized the importance to maintain the plural chances, also in order to put the brakes on the so-called "subsidence" of the national universities. A medical journal, however, comments that the rise in the number of universities which introduce the "bunri-bunkatsu system" is virtually making entrance examination of medical departments into the single track operation (in effect only "zenki", the earlier period), and this operation made the rise of the relative difficulty in entering into medical departments of private universities of substantial standing.

So, in this essay, we at first observed the transition of the pluralization of chances to apply for medical departments in national universities, and also analysed its present situation. Then we ascertained the merit of that pluralization by the observation of changes between 1980—1991 in the academic qualities of the applicants and new students in our college.

Department of Mathematics